

令和8年2月12日

世田谷区立中町小学校
校長 菅原 展生様

世田谷区立中町小学校
学校関係者評価委員会

令和7年度 学校関係者評価委員会報告書

令和7年度世田谷区立中町小学校学校関係者評価委員会は、中町小学校の教育活動及び学校運営について、学校関係者評価アンケート〔児童（5・6年生）／保護者／地域対象〕、学校独自アンケート〔児童（1年生～4年生）対象〕及び学校自己点検アンケート（教職員対象）の集計結果に加え、教職員との質疑応答、評価委員による学校参観（通年実施）等を総合的に分析し評価した結果を以下のとおり報告する。

1. 学校関係者評価アンケートについて

【回収数・回収率】

- ・児童（5・6年生） 回収数 157 回収率 95.1% Webにて実施
- ・保護者 回収数 245 回収率 37.8%（今年度は『すぐーる(*)』登録者対象）Webにて実施
- ・地域 回収数 27 回収率 47.3% 紙、Web選択式にて実施

*『すぐーる』は、学校から保護者への連絡を目的とした情報配信ツールであり、1児童につき各家庭4名まで登録できる。中町小学校では全児童において登録が行われており、登録率は100%である。

【実施日】

- ・令和7年11月7日（金）～ 令和7年11月20日（木）

【肯定的評価】

・文中の数値は、肯定的評価である「A：とても思う」「B：思う」の回答割合とし、少数点第一を四捨五入して表記している。

2. 重点目標についての分析と所見

中町小学校では、令和7年度学校経営方針において、「主体的に考え、課題解決に努める子」、「粘り強く最後までやり遂げる子」、「健康な心や体を自らつくろうとする子」の3つを重点目標と設定していた。

○重点目標1 主体的に考え、課題解決に努める子

今年度、学校では「既習事項を活かし、粘り強く課題解決に取り組む児童の育成」を学校の研究主題とし、児童ひとりひとりが問題意識をもって意欲的に課題解決に取り組めるよう、振り返りの在り方に着目した授業が進められていた。生活科、社会科、総合的な学習の時間、体育科の4教科に

において共通した授業方法を用い、児童が深く考えられる問題の設定や、既習事項を確認できる掲示物の工夫、単元の目当てを児童とともに考え合意形成を図る取り組み、授業の流れをパターン化して見通しをもたせる工夫などが行われていた。これらの取り組みにより、児童が学習に対して自信をもち、毎回の授業の振り返りを通して理解度や課題解決への意欲を実感している様子うかがえた。

アンケート結果では、「学ぶことが楽しい」と回答した児童の割合が5・6年生で72.6%、1～4年生で87.7%、「授業は分かりやすい」と回答した児童は、5・6年生で80.3%、1～4年生で96.4%、そして学校の自己点検アンケートで『主体的に考え、課題解決に努める子』の育成ができている」と回答した教職員は95.4%となっていた。さらに、児童がタブレットを活用することで発言や表現に意欲的に取り組むようになり意見を共有しやすい学習環境が整いつつあることが学校へのヒアリングで明らかになったが、アンケート結果では「タブレットを使って学習すると分かりやすい」と回答した児童は5・6年生で87.9%、1～4年生で91.6%と学年問わず9割前後に達していた。

これらから、児童の学習に対する意欲や授業内容の理解は概ね良好であり、学校の取り組みは学習意欲や理解の向上につながっていたと評価したい。今後は、ICTを活用した調べ学習を、より深い探究的な学びへと発展させるとともに、他者の意見を踏まえて課題解決へとつなげる力のさらなる育成を期待したい。

また、生活面における児童の主体性に関するアンケートでは、「自分のことは自分でしたり、できることを自分でやろうとしていたりする」と回答した児童の割合が、5・6年生で90.5%、1～4年生で94%であった一方、「子どもは自ら判断して行動したり、お手伝いなど進んで行ったりすることができる」と回答した保護者の割合が71.8%と、児童の結果とやや差が見られた。児童が学校で培っている主体性や課題解決への姿勢が、家庭においてもより実感されるよう指導や発信を工夫することで、日常生活に繋がっていくことを願っている。

○重点目標2 粘り強く最後までやり遂げる子

学校では、係や当番の担当を通して役割意識を育てる取り組みや、学期ごとに目標を設定し振り返る活動が行われていた。

アンケート結果では、「クラスや学校のために係や当番、清掃などの仕事を頑張ったり、誰かの役に立つ行動をした（5・6年生への設問）」と回答した児童が82.2%、「係や当番、清掃などの仕事を、自分の役割に責任を持って活動している（1～4年生への設問）」と回答した児童が92.6%、「目標をもち、それを達成するために努力している」と回答した児童が5・6年生で84.1%、1～4年生で94%となっていた。これらから、多くの児童が自分の役割を意識し、責任をもって行動している様子うかがえ、学校が学期ごとに目標を設定し振り返りや自己評価を行ってきた取り組みの成果だと評価したい。

しかし、「子どもは、目標をもちそれぞれを達成するために努力している」と回答した保護者が73.8%と、学校での児童の姿と家庭での見え方に差があった。児童自身が取り組んでいる努力や達成感を、振り返りの場面などを通して言語化し、家庭とも共有するなど、粘り強く取り組む姿勢がより一層定着し、家庭でも実感できるようになることを願う。

○重点目標 3 健康な心や体を自らつくろうとする子

学校では健康な心身の育成を目的として、全学年での「あいさつ運動」、体育の授業における体力向上を意識した指導、ならびに目標を設定した読書活動等を計画的かつ継続的に実施していた。あいさつに関するアンケート結果では、「自分から進んで、家族や友達、地域の方々へあいさつをしている」と回答した児童が5・6年生で84.7%、1～4年生で87.3%、「本校の子ども達は、あいさつができると思う」と回答した地域の方が59.2%、「子どもは、家庭や地域の方、友達に自分から進んで挨拶をしている」と回答した保護者が61.9%となっていた。また、学校の自己点検アンケートでは「毎学期の『あいさつ』にかかわる指導に組織的に取り組み、各学級でも指導を徹底している」と回答した教職員が95.4%で、「あいさつ運動」では児童が楽しみながらあいさつに親しむ機会となっていた、校内においてはあいさつが日常的に行われていた、といった保護者、関係者の声もあり、学校全体で継続的にあいさつの強化に取り組み一定程度定着している様子が見えてきた。以前よりも数値が高くなっているが、あいさつは一朝一夕で身につくものではなく日常的な積み重ねが結果につながるものであるから、さらに地域や家庭に伝わるよう引き続き継続的な取り組みが大切である。

運動に関するアンケート結果では、「私は運動することが以前と比べて好きになったり、できるようになったりしたと思う」と回答した児童が5・6年生で74.6%、1～4年生で93.3%、「子どもは体力の向上や健康的な生活に取り組んでいる」と回答した保護者が83.3%となっており、体力づくりに対する学校の取り組みが前向きな意識につながっていることがわかる。しかしながら、近年、児童の体力低下の指摘があることから、引き続き積極的な取り組みを望みたい。

読書に関するアンケート結果では、「私は読書が好きである（5・6年生へのアンケート）」と回答した児童が56.1%、「私はすすんで読書をしている（1～4年生へのアンケート）」73.2%となっている。とくに高学年において読書習慣の定着が課題とされたので、今後も学校全体で読書活動の工夫を継続し、読書習慣の定着につながる取り組みを期待する。

3. 学校関係者評価委員会の全般的な分析と所見

令和7年度の中町小学校における全般的な取り組みの中で、特に考察した項目は以下のとおりである。

【体験的な学習について】

学校では、キャリア教育の視点を意識しながら、日々の授業や特別活動において体験学習を積極的に取り入れていた。各学年の発達段階に応じた外部講師を招いた活動や、地域に実際に足を運んでの体験活動など、多様な学習機会が設けられていた。

学校の自己点検アンケート結果では、「キャリア教育の内容を適切に行っている」と回答した教職員が86.3%となっており、キャリア教育について、日々の授業の中でさまざまな工夫をこらして活動をしていることがうかがえた。具体的には、2回に増やした3年生の「弟子入り体験」、地域の方を講師として招いた野良田雛子の体験学習、茶道のような伝統文化に触れる活動、地域のデイホームで高齢者と交流する福祉体験、ネイティブの先生が1週間学校で児童と一緒に過ごすイングリッシュウィーク、地域の農家と連携しての食育授業などが行われている。特に野良田雛子の体験では、演奏や鑑賞にとどまらず、実際に楽器に触れるなど、児童が主体的に関わる工夫がなされてい

た。

このような多岐にわたる体験的な学習は、児童の興味・関心を広げるとともに、地域や仕事、伝統文化などへの理解を深め、多様な価値観に触れる学びにつながっており、実体験を通じた学びは、児童の主体性や将来への視野を育てる上で意義深い取り組みであると思料する。教職員が工夫を重ねながら体験的な学習を教育活動に位置付けている点を高く評価し、今後も、地域との連携を大切にしながら、児童が地域の良さに触れ、地域を大切に思う心を育む学びが一層充実していくことを期待したい。

【学校での児童支援について】

学校では、担任に加えて、他学年の教員、スクールカウンセラー、特別支援コーディネーター、栄養教諭、養護教諭、インクルーシブ教育支援員など多様な立場から連携した体制で、学年・学校全体で情報を共有しながら支援を必要としている児童を支えていた。

児童に対するアンケート結果では、「困ったことは相談できる人がいる」との回答が5・6年生で92.3%、1～4年生で92.6%となっており、学校および保護者へのヒアリングでは、児童が友だちや家族だけでなく、学校においても身近に相談できる大人の存在を認識している様子が見えたと。また、学校独自に居場所として設置した「ほっとる一む」は、不安を抱える児童にとって安心できる場所となっていて、保護者にとっても心強いサポートとして受け止められていた。

今年度は、学校全体で児童ひとりひとりの状況に応じた支援体制を整えて児童が安心して学校生活を送ることができるように進められており、教職員が連携しながら、児童の思いや状況に寄り添い、安心して学べる環境づくりに努めている点を高く評価したい。今後も現在の体制を大切にしながら、誰一人取り残さない学校づくりが一層進められることを期待したい。

【学校からの情報発信について】

学校と保護者の信頼関係の醸成に重要な学校からの情報発信について、学校では、日常的な連絡や情報提供の丁寧な発信に努めており、学校の自己点検アンケート結果では、「保護者への情報発信は適切に行えている」と回答した教職員が100%、「家庭との連携は、電話や連絡帳、配布物、HPなどを通して教育方針や児童の様子を知らせることができている」と回答した教職員が91%となっている。一方、保護者へのアンケート結果では、「学校だよりや学校ホームページなどから、学校全体の方針や子どもの学習・生活の様子が分かる」との回答が78.8%となっており、より分かりやすい情報提供を求める声も聞かれ、学校と保護者の認識に若干の差が見られた。

しかしながら、「学校からの情報発信に関して、『すぐーる』や学校ホームページなどを活用することにより利便性は高まったと思う」と回答した保護者が93.5%であり、情報ツールによって差が生じていると判断できる。今後は、有用な情報ツールを適切に活用し、日々の教育活動や体験的な学習のねらい・様子が、より具体的に保護者に伝わるような工夫を重ねてほしい。このような情報提供の充実により、学校での学びが家庭での会話につながり、学校と家庭が同じ方向を向いて児童の成長を支える関係が、より一層深まっていくものと考えられる。

4. 終わりに

今年度も学校が児童の充実した学びの実現に向けて、さまざまな工夫や努力を継続的に進めている

ることを高く評価したい。今後も児童、保護者、地域の声を大切にしながら、より良い教育活動の充実が期待される。

当学校関係者評価委員会は、本報告書が今後の学校運営や教育活動の改善・充実に資するものとなり、次年度の教育活動がより実りあるものとなることを期待する。

世田谷区立中町小学校 学校関係者評価委員会
飯田 千春、川原 千鶴子、菅沼 渉、添田 茂、丸山 容子、村田 美紀